

巻頭言：シンポジウム「人と植生の交渉史」に向けて

人と植生の交渉史を植生史研究会シンポジウムのテーマにしようという考えは随分以前からあった。事務局の議事録を繰ってみると、遺跡調査における植生史研究・人と関わりの深い植物の歴史・貝塚の古生態学などいくつかのテーマが候補に上がっており、近い将来取り上げられるべき大きなテーマの一つであった。候補に上げられたテーマの趣旨に共通することは、近年の急激な土地改変に伴う大規模な遺跡発掘による考古学的な成果と膨大な自然史に関する試・資料をどのようにに集成し、自然環境や人と自然の関わりをどのように読み取っていくのかといった成果の集成や研究方法の検討・開発がうたわれている点である。現に毎回のシンポジウム参加者にテーマについて意見を求めると、自然科学と考古学の関わり方や遺跡調査における研究方法をもっと突っ込んで議論すべきではないかとの声がしばしば聞かれる。第5回のシンポジウムのテーマは、上記のこれまでのテーマ候補の趣旨と皆さんの意見を配慮して立てられたものである。たとえば文化論や農耕論の内容を主体に取り上げるのではなく、人と植生の交渉を過去・現在・未来を通して具体的なものにするための現生・化石植物材料の研究手法の開発や研究史的に見た展望を中心に上げようとしている。したがってそれらは文化論や農耕論の実証性には深く関わってくるとは言えよう。

植生史研究会のシンポジウムのテーマは当分のあいだ基礎的な問題に執着したもののほうがよいと多くの方々は考えている。たいへんうっとうしい印象を与えてしまうとの危惧を抱く方もあるかも知れないが、これまでのシンポジウムに参加されたりテープから起こされたシンポジウムの記録を通読された方は、大なり小なりそうした基礎的な問題を掘り起こす必要性を実感されることだろう。たとえば本誌に掲載された第4回シンポジウムの記録をめくってみると、種の同定基準が研究者によって違っていて日本列島での種の分布図を描くと研究者マップになってしまうなどという現象、2百個の花粉化石集団と2千個の花粉化石集団の当然ともいえる情報としての質の違い、そういった問題が続々と見出される。会場ではそういう話にどっと笑い声がおこるのだが、そのどよめきは舞台上の喜劇に対してのものではなさそうなのである。先年の文部省科学研究費補助金特定研究「古文化財」のプロジェクトが活発に展開される中で、もっとも注目され研究方法の進展をみせたのは基礎的な部分にあった。それを象徴するような一つのことばが藤下典之氏の論文にある。「筆者が手を付ける以前になされてきたような、種子屋の店頭から購入した種子と比較して、マクワに似ていたからマクワ、シロウリに似ていたからシロウリと同定するやり方は、栽培植物に対しては通用しない」。そのとき同じようなどよめきがあったに違いない。これは同定をめぐる問題であるが、層序・編年・タフノミー・生態・形態・分類などなど問題の広さ・深さはこれにとどまるものではない。

なぜそういう問題を中心にすえるのか。一にも二にも創刊号の巻頭言にもどらなければならない。植生史にたずさわる研究領域は広く、なかなか会話の機会がもてなかった。あの人は地質学だから同定はどうもとか、あの人は分類学だから層序はどうもとか、そういう話が巷を賑わしている。それぞれ多様で複雑な問題を保有しているながらも、煮詰めるべきあるいは解明すべき共通のものとする場がほとんどなかった。行き着いたその場の一つがこの植生史研究会である。会誌に盛り込まれる論文が総説に限られるのは、幅広く多様な領域への理解を相互に深めようとの意図があるからである。だれにも手の届きそうなところにテーマが据えられるのも実はそうした理由によるのであって、必ずしも大規模な学会で開催されるおごりかなシンポジウムを目指しているわけではないからである。いまだにというよりは、日増しに回を重ねるたびに植生史研究における問題点が具体性を帯びてきたことを素直に進展と受け止めていいように思うのだが、それはあまりにひいき目であろうか。

昨年はじめて大阪を離れて滋賀県琵琶湖研究所で開催されたシンポジウムは、今年はずっと離れた千葉で開催のはこびとなった。ひとところに居ると殻ができてしまいがちである。まして殻が厚くなることなどだれしも好むところではない。いろいろな方々がひびきを交えたシンポジウムに参加されることを願ってやまない。